

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

二 捜索する男子と訪問する女子 その1

インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

アオイさんらしき靈を目撃したという野良猫を見つけました』

「……目撃した野良猫？」

١٢٥

「ああ……えっと、何と言つたらいいかな……」

そう言えば、どんな方法でアオイさんに聞

二 捜索する男子と訪問する女子 その1

ようたがアキホさんを連れてきてから二日が経つた。

「まずは状況を整理しましょうか」

リビングには僕を含めて三人、集まっていた。ソファーに座っている岩男さんと、その後ろに佇ん

でいるアキホさん。椅子に座つた僕は、二人に向かつて話へ始めた。

「うん」
橋三は歎息しながら食い入るに向かって話し始めた

頷く岩男さん。

——はい……」

ちなみに今日、ようたの姿はない。用事があるとか

で来ることがで

「二日前、最初の搜索の時に岩男さんの猫が得た情報だと、ここからそう遠くない場所にある通りで、

「ありがとうございます、岩男さん」
情を浮かべてアキホさんは頷いた。
納得したような、余計に困惑したような微妙な表情

説明してくれた岩男さんにお礼を言つて、僕は話を続ける事にした。

「その野良猫は、三ヶ月ほど前に、アオイさんに似た特徴を持つ霊を何度か見たようです。それで、アキホさんに訊ねたいのですが」

「は、はい。何ですか？」

「アキホさんは、いつからアオイさんを探し始めましたか？」

そう訊ねると、アキホさんは思い出すように天井を見上げながら言葉を紡いだ。

「えっと……私が死んだのが、一年くらい前で……その後に自分が霊になつたと意識したのが半年前くらいです。それから直ぐにアオイを探し始めました」

「という事は約半年前から、アオイさんを探しているという事ですか？」

「はい……」

アキホさんは頷いた。

「探した場所は、アキホさんが生前によくアオイさんと会っていたと言っていた公園の辺りだけですか？」

「いえ、いろいろな場所を探しました……多分、市内は一通り探し回ったと思います」

「そうですか……」

アキホさんの話を聞いて、僕は違和感を覚えた。

「おかしいな。野良猫がアオイさんに似た人を見たのが三ヶ月前で、それよりも前からアキホさんはアオイさんを探していた……」

顎に手を当てて、考えるようにしながら岩男さんは続けて言つた。

「少なくとも三ヶ月前にアオイさんがこの市内にいたのなら、アキホさんと遭遇しない方が不自然ではないかな？」と、私は思うのだけれど

どうだろうリョウ君、と岩男さんは僕も感じていた違和感を言葉にしてくれた。

「僕もそう思います」

野良猫はアオイさんに似た霊を、『何度か』見たらしく。

もし、その霊がアオイさんだとしたら……。

意図的にアキホさんに見つからないように行動しているようにも感じられる。

「何で……会えないの。どこにいるの、アオイ……」

下を向きながらポツリとアキホさんは呟いた。

「それで、今日はその野良猫が、アオイさんらしき霊を目撃した場所に行つてみたいと思うのですが」

「……はい。お願ひします」

顔を上げてアキホさんは言つた。

「本当は昨日のうちに行きたかったのですが、それぞれ用事があつて都合がつきませんでした……すみ

ません」

頭を下げる僕は言った。

「い、いえ。こんなに協力してもらって、こちらこそ、すみません……」

アキホさんは手を振りながら何度もお辞儀をした。

「それじゃあ行こうか」

ソファーカラ立ち上がって岩男さんは言つた。

今日の搜索でアオイさんに繋がる決定的な何かが掴めたらいいけど……。

そう思いながら玄関へと向かつた。

☆

シマさんがアオイさんを連れてきた日の翌日の夕方に、母さんから夏美さんの住んでいる場所についての連絡が来た。
「電話番号までは分からなかつたから、会うなら直接、行かないといけないけど……」

そう母さんは言つた。

「できるなら、事前に連絡はした方がいいと思うけど……しようがないか」

電話の後、私は自室で腕を組みながら悩んでいた。
「お菓子とか持つて行つた方がいいかな？ シマさ

隣にいるシマさんに訊ねた。

「うん。まあ、その方が無難じゃないかな」

「そうだよねえ」

私は頷いた。

その翌日の朝。

なるべく早めに夏美さんに会つた方がいいかも、と思った私は、さつそくお家を訪ねることにした。

「ここかなあ」

紙に書いた住所を私は何度も確認した。

全体がコンクリートでできたこの家に、夏美さんは住んでいるらしい。

お家は市内にあつたので、探すのはそんなに難しくはなかつた。

「お菓子よし……！」

来る前に店で買った少し高めのお菓子が入つた袋を、私は改めて確認した。

「それじゃあ、インターほんを押してみるね？ アオイさん」

緊張しながら、隣にいるアオイさんに確認した。

「はい」

頷きながらアオイさんは言つた。

ちなみに今回、話がややこしくならないようになつた。

「……よし！」

気合を入れてから、私はインターほんを押した。

ピー、と室内から、微かに電子音が聞こえた。

ドキドキしながら待つこと数十秒。

ガチャっと、玄関が少しだけ開いた。

「……君は誰？」

顔だけを外に覗かせて、男の人が私にそう訊ねた。

「こ、こんにちは！」

私は勢いよくお辞儀をした。

「あの、私、湖（うみあそび）たまといいます。夏美さんという方を訪ねてきたのですが……」

「……俺を訪ねてきた？」

どうやら、出てきたこの男の人が夏美さん本人らしい。

「は、はい。少し相談したい事があつて」

「相談って……」

ここで夏美さんは私の隣に視線を向けた。

「……」

アオイさんを見ると、夏美さんは明らかに嫌そうな顔をした。

この人、アオイさんの事がちゃんと覗えている！

「相談って君の横にいる、その靈について……と

か？」

どんよりとした雰囲気を纏いながら夏美さんは訊ねた。

「は、はい」

私は勢いよく頷いた。

「そういうの、今は断つているんだけど……」

はあ、と夏美さんは溜息を吐いた。

「君は、誰から俺の事を聞いたの？」

「えつと、母からです。遠い親戚に靈に関する事を

相談できる人がいる、と」

「親戚ねえ……」

夏美さんは少し考えるようになると

「君、名前は何といったつけ？」

そう私は訊ねた。

「湖たま、です」

私が答えると、夏美さんは目を細めた。

「うみあそび……湖ね」

そして、数秒目を閉じて何かを考えると

「……力になれるかは分からなけれど、とりあえず

話だけは聞くよ」

と、言ってくれた。

「あ、ありがとうございます！」

「どうもありがとうございます！」

私とアオイさんはお辞儀をした。

「それじゃあ、入つて」

半開きだった玄関のドアを全開にして、夏美さん

は家の中へと入れてくれた。

「どうぞ、そこに座つて」

リビングには赤と黒のソファアリがあつて、黒い方のソファアリに私とアオイさんは座つた。

「それで、具体的に今はどういう事で悩んでいるのかな……」

赤色のソファアリに座りながら夏美さんは訊ねた。

「グソー……に行きたいのです」

アオイさんは夏美さんの目を見て言つた。

「グソーって、『あの世』に行きたって事？」

「はい」

「……親の仕事を手伝つたりした時に、いろいろな体験をしたけど、今回のケースは初めてだな……」

白髪交じりの髪を触りながら、夏美さんは天井を見上げた。

「俺の経験的に、靈は何かしらの執着が無くなれば自然と消え……あの世に行くと思うんだけど……」

夏美さんは続けて言つた。

「アオイさん。あなたは何か気がかりな事や、特定の人に対して強い感情を抱いていませんか？」

「それは……」

夏美さんのその問いかけに、アオイさんの表情が少しだけ揺らいだように見えた。

「……ない、と思います」

「……アオイさん？」

執着している事はない、と言つた時のアオイさんの様子に、私は何か引っかかりを感じた。

「そうですか……」

夏美さんは指を組みながら少しの間考えた後に、私たちの顔を見た。

「今の状況で俺ができる事が一つだけある……かな」

「な、何ですか？」

ソファアリから少し身を乗り出して私が訊ねると。

「祓う事」

と、夏美さんはそう答えた。

「は、はらう？」

はらうって「お祓い」の事だろうか？

「アオイさんは、人や他の靈に対して害を与えたりはしていないようだから、『祓う』って言葉は少し適切ではないかも知れないけど」

「は、はあ」

夏美さんは私とアオイさんを交互に見て続けて言った。

「俺の家系は代々、靈や、普通の人には見えにくく物事に対して関わってきた。親はこういう相談事を仕事としてきたけど、俺は違う」

「そうなんですか？」

「ああ」

頷いた夏美さんは、だけど、と続けて言つた。

「……だけど、たまに親父の手伝いをしたりした時に、靈に対する対処法を一通り習いはした。その中



の一つが靈を祓う儀式」

「その儀式を行えば、私はあの世に行くことができるのでですか？」

アオイさんは訊ねた。

「……それに答えるのは難しい」

「ふー、と息を吐いて夏美さんは続けた。

「親父たちは、祓いの儀式を行つた靈が行く先は、『あの世』や『天国』と言つていた。しかし、それは代々そう言われてきただけで、祓われて消えた靈の行く先を、実際に見てきた人はいない」

「そう……ですか」

「そもそも俺の家に伝わる祓いの儀式は、いわゆる、『悪霊』に対して行わってきた。無害の靈を祓うとどうなるのかは分からぬ」

なるほど。それでさつき、「それに答えるのは難しい」と夏美さんは言つていたのか。

「今はなるべく靈に関わらないように俺は生活をしている」

そこで一旦言葉を区切ると、続けて夏美さんは言つた。

「……だが、せつかここまで来てくれたから、祓いの儀式をしてもいい、と思っている。遠いけど君は戚戚らしいし……」

私を見て夏美さんは言つた。

「リスクは結構あると思うけど……やるかどうか



は、アオイさん次第だ」

ピリッと、雰囲気を鋭くして夏美さんはアオイさんに訊ねた。

「お願いします」

間をおかないでアオイさんは答えた。

「……そう。それじゃあ始めようか」

よっこいしょ、と言つて夏美さんは立ち上がった。

「あ、あの、もしかして今からその、『祓いの儀式』ってやつをするんですか？」

儀式、と言う言葉になぜか少しだけビビつた私は思わずそう訊ねた。

それに對して夏美さんは。

「え、うんそういうけど。あ……もしかしてこの後何か用事とかあるの？」

何てことはないといった感じで、そう言つた。

「い、いや、そうではなくて。儀式って言うから何か準備するのに数日かかるのかなあ……と思つて」「ああ、そういう事」

納得したように頷いて、夏美さんは続けて言つた。

「他の土地で儀式をする時には、確かに日にちがかかるけど、『この土地』だつたらそんな必要もない

「はあ……そうなんですか」

この土地……って夏美さんの、この家って事だろ

うか？

「改めて、よろしくお願いいいたします」

アオイさんはソファーから立ち上がると、深く頭

を下げて夏美さんにそう言つた。



「うーん……どこにも見当たらないね、アオイさん

伸びをしながら岩男さんは言つた。

「……ですね」

公園のベンチに腰をかけて僕は言つた。

「あれ？ リョウ君、アキホさんは？」

辺りを見ながら岩男さんは僕に訊ねた。

「もう一回探してくると言つて、行きました」

僕が答えると。

「……アキホさんにとって、アオイさんって人は本

当に大切な存在だったのだろうね」

空を見上げながら、岩男さんはそう呟いた。

「僕も、そう思います」

探している間アキホさんの顔はずつと、必死といつた感じだった。

「……これは私の率直な意見なのだけど

声のトーンを少し低めて岩男さんは続けて言つ

た。

「このまま地道に探しても、アオイさんは見つからない……そんな気がするんだ」

「そう……ですね」

確かに、野良猫から得られた情報以外に状況に進展がない。

「行き詰まつたこの状況を打ち破る何か……それがないと……ね」

はあ、と岩男さんと僕は同時に溜息を吐いた。

その時。

「何してんの、リョウ」

突然、背後から声をかけられた。

「え？」

驚いて振り返つてみると、そこには。

「坐道！」

「何か久し振りだね」

そこには同居人の坐道がいた。

黒いシャツに黒いズボン。全身、黒色で統一されたファッショニに身を包んだ坐道は、いつものように真っ白なマスクで口元を覆い隠し、帽子を目深に被つていた。

「おい、坐道！」

岩男さんは勢いよく立ち上がると、坐道に詰め寄つた。

「お前、家にも戻らないで何をしていたんだ！」

普段は温厚な岩男さんが感情を剥き出しにして坐道に怒鳴った。

「何って言われても……ボクはボクなりにいろいろとやつているよ」

平坦な口調で坐道は言つた。

「ほんっとうに、お前や浮鳥は……！」

「ま、まあ岩男さん。落ち着いて」

このままだと喧嘩になりそうなので、間に入つて

岩男さんを止める事にした。

「しかし、リョウ君！」

「一度、皆で集まつた時に話し合いましょう」

「……分かった」

ふー、と三回ほど深呼吸をして、岩男さんは怒りを収めた。

「何か……今、困っている事でもあるの？」リョウ

「ウ

坐道は僕を見て訊ねた。

「うーん……困っているというか……」

岩男さんの怒りが再び噴火しない内に、僕はアキ

ホさんの事を坐道に話した。

「……なるほど。行き詰っているのか」

「うん」

僕が頷くと、坐道は首を傾げて数秒考えるように

した後に

「ボクの力を使えば、何とかなるんじやね？」

と言つた。

「坐道の力？」

「おい坐道、それは……！」

岩男さんは険しい顔になつて坐道を見た。

「ピソとこない僕とは違い、岩男さんは直ぐに坐道が

言おうとしている事を理解したようだ。

「うん。ボクの力だつたら、アキホって靈がアオイ

つて靈に会えるように、『縁』を意図的に繋げる

事ができる……かも」

「そんな事ができるんだ、坐道」

坐道とは三年ほど一緒に過ごしてきたけど、そんな能力があるなんて初めて知つた。

「だが、お前のその力は、『何か』と引き換えに

……だろ？」坐道

静かに落ち着いた声で岩男さんは訊ねた。

「そうだよ、岩男」

坐道は頷いた。

「もし、その力を使つたら、『誰』から『何』を奪

うんだ？」お前は

冷たい声で岩男さんは訊ねた。

「『奪う』って言い方は少し棘があるな。何かを得るんなら、何かを差し出すのは当たり前じゃな

い？」

変わらない調子で岩男さんにそう返して、坐道は続けて言つた。

「そうだなあ……その、『アキホ』って靈の……『魂』と引き換えなら、何とかできるよ」

「魂つて……」

「何だか話が重たくなってきたような……。」

「言つておくけど、ボクの能力を使わないでも、アオイつて靈を根気よく探し続けていたら、いつかは運よく出会う事ができるかも知れない。だけど」

坐道は続けて言つた。

「それ以上に会えない可能性の方が高いと思うよ。リョウの話を聞いた限りではね」

「お前のその力を使えば確実に会えるというのか？」

岩男さんは坐道に訊ねた。

「うん。ボクの力を使えば必ず出会うができる」

「断言できるのか？」

腕組みをしながら岩男さんは訊ねた。

「うん。必ず」

坐道は頷いた。

「……とりあえず、どうするのかはアキホさんが戻ってきてからだね」

二人のやり取りを聞いて、僕は言つた。

もし、坐道の言う「縁を結ぶ力」を使うとしても、その代償を払うのはアキホさんになるようだ……。何にしても、アキホさんとよく話してからにしないと。

「……あ、そうだ坐道。浮鳥がどこにいるのか知らないか？」

思い出したように岩男さんは浮鳥の事を坐道に訊ねた。

「浮鳥？ 今どこにいるのかは知らないけど……」

「あ、そう言えば、ナハの辺りで飲んで、はしゃいでいたつて噂は聞いたかな」

首を傾げて坐道は言った。

「あ、い、つ……次に会つたら殴つてやる……！」

岩男さんの額に血管が盛り上がった。

「岩男は美人だから、怒りっぽくなければモテそうだけど……」

唐突に空氣の読めない発言を坐道はした。

「ふ、二人とも。とりあえず、アキホさんと合流しよう」

僕は二人の手を引っ張つて歩き出した。
これ以上、坐道と会話をしていたら岩男さんが切れそうだ……。

つづく